

宮本三郎 生誕100年記念 の描いた女性像

12月3日^土 — 2006年3月26日^日 豊麗なる絵画世界

「描くということは、
歓喜を見出してこそ始められることである」



《婦女三容》1935年（小松市立宮本三郎美術館蔵）



《裸婦》1954年



《假眠》1974年

今年度、当館では宮本三郎の生誕100年を記念する展覧会を、3期にわたり開催しております。

第1期展では「素描」を、第2期展では「戦争」をテーマに、それぞれ「技法」と「時代」の観点から、宮本三郎の画業を回顧して参りました。

この度、その第3期展として、宮本三郎が終生描き続けたモチーフである、「女性像」をテーマに、その画業の軌跡をたどります。

初期から晩年に至るまでの宮本三郎の作品群を見渡すと、人物を描いたものが圧倒的に多いことに気がつきます。なかでも女性を描いたものが大半を占め、それらを通観すると、生涯一貫して独自の写実表現を追い求めた宮本の、試行と、作風の変遷が見て取れます。

逝去する前年に出版された画集の中で、宮本は、次のように記しています。

「私が作画の上で、真の解放感と、<生の喜び>とが一つになったことを、はっきりと意識できるのは、ここ十年位の間の幾つかの個展の制作においてである。<花と裸婦>の連作、そして<女神たちの復活>などは、私の人生と、私の画業とのたどり着き得た記念碑と言えるかと思う。」（『画集 宮本三郎』1973年・毎日新聞社）

昭和という激動の時代を生き、時にその流れに翻弄されながらも画家として歩み続けた道程は、晩年の、<生の喜び>という主題に結実しました。裸婦を数多く描き、そこに単なる造形的な美しさを越えた、精神的な、内面世界の美を見出し、そして、「生きる」という、人間にとって最も根源的な喜びを表現したのです。

本展では、世田谷区奥沢のアトリエで完成した最初の作品、《婦女三容》（1935年・小松市立宮本三郎美術館蔵）を特別出品し、絶筆となった《假眠》（1974年）へと至る、宮本三郎が描いた「女性像」の移り変わりをご紹介します。

浴衣を着た日本人女性をモデルに、意識的に「日本的洋画」を描いた初期作、戦後の、褐色を主調とした光線の時代、昭和の銀幕を彩った女優の肖像の数々、そして、晩年の、華やかな色彩の世界まで、世田谷区奥沢のアトリエで育まれた、実り豊かな画業をお楽しみください。